

【中学生の部：文部科学大臣賞】

「今、私達にできること」

山形県・山形市立蔵王第一中学校
2年 丸山 秀香 さん

私の母は、小学校教師です。何年も前から、特別支援学級の先生をしています。

私が小学生の頃、特別支援学級の教室には、たくさんのおもちゃが置いてありました。私は、ただ「ずるいな。」と思っていました。それは、家に帰っても同じでした。私が宿題をしている脇で、母は慌てた様子で何かの準備をしていました。私が何かを思って訊ねると、母は、明日、授業でホットケーキを作ると言いました。私は、それがとてもうらやましく思えました。

「良いよね、支援学級は。簡単な勉強をして、いつも遊んでいて。」
無意識に、うらやましい気持ちを声に出していたのです。すると母は、

「秀香、あなたができて、できない子はいるのよ。これは、ちゃんとした教育なの。」

少し強めの口調でしたが、とても優しい眼差しでした。その頃の私は、まだ納得することができませんでした。ただただ母を奪われたような気がしたのです。

母の仕事は、私が知っている以上に大変な仕事だと思います。家で母と話す度に、段々と「特別支援学級」について興味が湧いてきました。そして、母から色々なことを教えてもらいました。

それから、同じクラスの支援学級の子も、あまり気にならなくなりました。むしろ、優しく声をかけてあげたくなりました。この時の私は、障害があつてかわいそう、という気持ちを持っていました。障害は、確かにかわいそうなことだと思えます。でも、それを物凄く同情し、関わらないようにするのは、違うと思ったのです。私が気付いたこと、それは「同情すること」と、「理解すること」は、全く別のものであるということです。

「理解すること」とは、相手の心に寄り添っていくことだと考えています。私達中学生は、「特別支援学級」や「障害」を、理解している人が、まだまだ少ないでしょう。そう考える理由は、障害者に対し笑ってばかりにしたり、避けて菌扱いをしたり、悪口や陰口などが見られるからです。これは、もうすでに「いじめ」と言える状況です。

ー特別支援学級の人だからいいんだ。
などと、思っていませんか。それは「いじめ」だと気付くべきです。人として

恥ずかしくありませんか。

私は、少しずつでも変えていけるきっかけを、作っていきたいと思います。もし、急に泣き出したり暴れたりする相手に、どう接していけば良いのだろう。そう思ったら、優しく明るく話してみることから始めてみて下さい。困っていたら、声をかけて下さい。泣いていたり、暴れているときに、笑わないで下さい。

たったそれだけのことに気付き、心がけていくことで、理解は深まっていくと思います。それが、人と「寄り添う」ことだと思います。

「障害」というのは、ある日突然やってくることもあります。もし、私がその立場だったら…。もし、家族がそうなったら…。考えてみました。私が障害者になっても今の友達に友達でいてほしい。苦しいときに支えてほしい。家族や友人、お世話になっている人に申し分けなく思うかも。元の自分に戻れないのが、死ぬ程悔しいだろう。

こう思うのは、果たして私だけなのでしょうか。きっと、多くの人が同じような気持ちになると思います。

「自分に関係ない、と思わずに、一度周りをよく見て下さい。これが、私と母の願いです。」